

中国で古典が復活

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

このところのマスコミでは、世界のあちこちで騒乱が伝えられ、憂慮に堪えません。それらには共通の原因や論理があるのではないかと思いつつ、「文明」についての勉強をしながらその日暮らしをしていました。

そんな折、3月19日付読売新聞に格好のネタがありましたので、その記事をテーマに始めようと思います。大見出しは「本場で活況 四書五経¹⁾」とあり、中見出しには「中国、論語など私塾ブーム」とあります。

イントロダクションは次のように書かれています。

「中国で、伝統的教養『国学²⁾』を子供たちに教える『私塾』が活況を呈している。背景には、中国の経済発展に伴って大国意識が高揚し、富裕層の間で伝統文化への自信が強まっている事情がある。習近平政権が掲げる『中華民族の偉大な復興』のスローガンも、国学ブームを後押ししている」

孔子を代表とする伝統的国学は、1949年の中華人民共和国建国以来消滅していました。特に1966年から始まった文化大革命の10年間は、「封建主義・資産階級の教え」として徹底的に封殺されてきました。しかし、近年では私塾に限定されてはいますが3000箇所ぐらいで国学を教えているそうです。世界第2の経済大国となったことで、富裕層の間では自国文化に誇りを持つ人が増えてきているとも言われます。

中国の私塾は、義務教育(小中9年間)外です。前政権(胡錦濤)時代には認可されていませんが、現政権では黙認されています。これは習近平政権

が強調する「中華民族の偉大な復興」を実現させるためには、伝統文化や道徳観を重視する国学を利用しようとする策に合致すると読んでいるからでしょう。

ともあれ古典といわれる四書五経、とりわけ論語などの日本人にも親しまれている教えが復活する兆しが見えてきたことは嬉しいことです。中国は鄧小平の「白猫・黒猫…」以来しゃにむに経済発展に突き進み、現在はGDPで世界第2位になるまで成長しています。その結果、昨今の貧富の格差は恐ろしいくらいです。その手段には、道徳のかけらも見えません。私もこれが「儒教の国か」と思われることをしばしば体験させられました。

考えてみれば、現代中国人は「論語」も知らないし、教えられたこともないのです。私が顧問をしている華人紙の陽光導報に「論語」を執筆したのも、中国人を刺激しようとしたことが動機でした。中国人の留学生から「日本人なのになんで論語を知っているのか」という質問がありました。そこで「日本の学校(私は私立の中高一貫校卒)では、中学3年から漢文という授業があり、教科書が論語だった」と答えましたが、びっくりしていました。

しかし、ここで心配なことがあります。「古きよき中国の復活」であればいいのですが…どうも動機が違うようです。習近平政権が唱えることは「中華民族の偉大な復興」です。まさに中華思想の復活であることです。ここでその中華思想なるものを要約してみます。

1. 「中華思想」という思想

～「中国の思想」: 竹内実(著)より～

儒教・道教・法家など様々な流派を源流とした思想がある。それらを総称して中華思想というが、あくまでも外部が貼ったレッテルである。中国との交渉がうまく進展しない場合、バリアとしての概念ともいえる。

しかし、中国には自称として「華夏」がある。「自

分たちは天空の下に広がる台地の真ん中にいる。動き回る範囲は広く、人間もたくさんいて物産は豊かである。服装も儀式も立派で秩序がある。我々は中華である」。周辺には未開の「東夷・西戎・南蛮・北狄(総称して夷狄という)」があり、中華は「内」、夷狄は「外」。

夷狄は中華に服従し、尊敬する限り、中華は面倒をみる。中華より古い呼称が「華夏」、「中夏」である。中国の一番古い王朝が「夏(大きいという意)」。夏は広い平原の真ん中の集落(中国)で黄河流域を移り住んでいた。中華思想というのは、漢民族及び漢民族に同化された周辺民族が、自然に身につけた自己認識である。中央にいて栄え、文化も高いという誇り(奢り?)だ。

*日本では「原則として」は、例外がある事を暗示するが、中国では「原則」は厳格に遵守されるもの。例外措置は一切無い。中華思想が「中華思想」であるためには、自信を失ってはならず、強硬に主張する際には「強硬」でなければならない。頑迷固陋、古色蒼然である。

2. 中国人にとっての「中国魂」

～「中国人の愛国心」：王敏(著)より～

「修身齐家治国平天下」身を治めることが、家をまとめ、国を治め、天下を平和にする。(四書五経の大学より：紀元前430年ごろ)。儒教精神により国民の間に根付いた。国という概念の始まりは春秋時代。それ以前の殷や周の時代は単一または少数民族が集まった集合体でしかなかった。

周以降に周辺の西戎などの侵略で「国」という「勢力範囲・別世界」という認識が生まれた。「國」は“ある地域を城壁(口)で囲み、戈(ほこ)で守る”の意。中国人にとっての愛国心とは「国を愛する

ことは自分を愛すること」。「自分のために国を愛せ」ということ。戦前の日本の「大和魂(滅私奉公)」とは異なる。

中国は理想のモデルを創るのが好きだ。愛国者のモデルは南宋時代の岳飛(1103～41)である。北方から侵略する金軍に身を挺して抗戦した。「民族文化と尊厳」を守るために。背中には「尽忠報国」の刺青があったという。

3. 「新常態=ニューノーマル」

直近終了した全国人民代表大会で李克強首相は「新常態」と位置づける新たな経済情勢下での構造改革推進を表明しました。経済成長率は7%前後ということですよ。減速は明らかになりました。日本では高度経済成長が終わりに近づいたとき「安定成長」とか「成熟社会」などという言葉が氾濫しました。「量から質の時代」ともいいました。中国では「新常態」というのでしょうか。見せ掛けの栄華は終わりにしてもらいたい。地位や財力をこれ見よがしに広いマンションに住み、高級外車やブランド品で身を飾るような中国人はもう見たくありません。これから何年かかるかはわかりませんが、私が望むような中国の大人(たいじん)になってほしいと思います。中国には数千年にわたって研鑽を継いだ「賢人の教え」があるのですから。

■注

- 1)四書五経：儒教の経典で重要な書物を指す。四書は「大学・中庸・論語・孟子」をいい、五経は「詩経・書経・礼記・易経・春秋」をいう。
- 2)国学：儒教や道教、仏教の教え、中国の歴史、思想哲学、書画、音楽、医学など多方面にわたる。儒教の場合、古代中国で倫理規範を説いた孔子の教えなどを記した経典が重要な教材となる。